

クラス唯一の男子が教材になって陰部洗浄された看護学校の話

樋口湊は看護学校に通う2年生。彼はクラスで唯一の男子生徒だった。クラスメートは20人近くいて彼以外全員女子。看護師を目指す彼は、いつも女子ばかりの環境に慣れていた。

ある日の夜、湊は寮の部屋でため息をついていた。明日は実習の日。テーマは「患者の清拭と陰部洗浄」。教科書には詳細に手順が書かれているが、実際のモデルを使うとなると、クラスに男子が自分しかいないのが問題だ。講師の山田先生は女性

で、メールで「湊くん、明日の実習でモデルをお願いできないかしら？ もちろん、ボランティアとしてだけど、報酬は単位の優遇で」と連絡が来ていた。断りきれず、OKしてしまった。心臓がドキドキする。「女子たちに、ちんこを見られるのか...」と思うだけで、顔が熱くなった。想像するだけで恥ずかしい。彼女たちは友達だけど、こんな状況でどう反応するんだろう。夜中、ベッドで転がりながら、興奮と不安が混じった感情に苛まれた。「まさか、勃起したりしないよな...」と自分に言い聞かせるが、余計に意識してしまう。

クラスメートの明里の明るい笑顔、美雪の少しお茶目な表情、有紀の内気な視線...。彼女たちの手が自分のち

んこに触れる想像だけで、体が熱くなる。「いや、ダメだ。真面目な実習なんだから耐えなきゃ」と思い直すが、股間がむずむずする感覚に、布団の中で体をよじった。時計は深夜2時を回り、眠気が来なかった。

翌朝、学校に着くと、クラスメートたちがひそひそ話しているのが聞こえた。「今日の実習、湊くんがモデルだって！」「えー、ほんとに？ 陰部洗浄とか、超恥ずかしくない？」「でも、実習なんだし、仕方ないよね。でも、湊くんのちんちん、見ちゃうんだ...ふふっ。」明里が美雪に耳打ちしている。湊は耳を赤らめて、席に座った。彼女たちの会話が耳に入るたび、湊の心臓が速くなる。「みんな、楽しみにしてるみたい...俺のちんこを...」と

思うと、席で足を組んで隠すようにした。授業が始まると、山田先生が説明した。「今日は陰部洗浄の実習です。患者のプライバシーを尊重し、清潔を保つことが重要。モデルは湊くん

に協力してもらいます。皆さん、真剣に取り組んでください。」クラスメートたちは頷くが、目が輝いているのがわかる。先生は50代のベテランで、厳しいが優しい。湊は控室で着替えを命じられ、白いガウンだけを着て待機した。心臓が早鐘のように鳴る。「絶対に反応しないように…」と念じる。控室は狭く、鏡と椅子だけ。ガウンを羽織った自分の姿を見て、「これで下半身が丸見えになるのか…」と震えた。外から女子たちの声が聞こえ、「湊くん、緊張してるかな?」「きっ

と可愛い反応するよ」との囁きが漏れ聞こえる。湊は深呼吸を繰り返し、手を握りしめた。

実習室に入ると、ベッドが置かれ、周りに女子たちが並んでいる。先生が「では、始めましょう。まず、患者の同意を得て、プライバシーを守る。湊くん、ベッドに横になって。」湊は頷き、ベッドに仰向けになった。